報告資料１－１

令和元年度　社会教育委員会等研修会【参加レポート】　　新潟市教育委員　角野仁美

■期日：令和元年６月 26 日（水）10:30～15:30

■会場：新潟市黒埼地区公民館

■参加者：９５名（社会教育委員、生涯学習・社会教育行政関係者）

■研修内容：

① 全国社会教育研究大会青森大会視察報告、新潟大会進捗状況

講師　山田智之（新潟県社会教育委員連絡協議会　会長）

② 講義「社会教育委員は何をすべきか–新潟大会に向けて–」

講師　（一社）全国社会教育委員連合会会長／青山学院大学コミュニティ人間科学部　教授　鈴木眞理

③ ワークショップ

■「②講義」内容のメモ　～鈴木先生講義録～

１）はじめに

・社会教育に対する理解が貧弱になっている。特に行政の管理する社会教育の在り方が、まちがってきている。いろんな政策が部分的に行われていて、その本質が体系的に捉えられてない

→**「主体」の客体化**　例）元気をもらった、感動をもらった→本来、元気や感動は「湧き出る」もの

社会教育法第５条　市町村の（上から言われて）やることが、あれもこれも増えてきている。

本来は市町村が中心となって、社会教育委員が色々考えていくべきだが、それがなくなってきている

・社会教育委員は何をすべきか？

社会教育委員に期待されることを語るというのは気が重いが、社会教育の状況は悪くなってきている。当初、考えられていた理念から遠ざかっている。2011 年の東日本大震災以降より、そういう念が強くなっている。

→日本青年館　社会教育 2011 年 11 月号「戦後の社会教育について～何を得て、何を失ったか～」

全日本社会教育連合会 2011 年「社会教育の危機」

このような投稿をしたが、状況は何も動きはしない

２）このかんの憂いとこれまでの憂い

・全日本社会教育連合会が解散し、日本青年会が「雑誌：社会教育」を引き取る。どうやって維持していくか。昔のやり方でやってきた団体は、それでは通用しなくなってきたことを、全国的な団体の動向をみれば、如実に分かってきている。

・技法が席巻している：実際の内実、内容が考えられていない。社会教育は技法だという発想があるかのように、「参加体験型の学習」それの功罪がとらえられている。

→昔は保守と革新という対立の中で、教育が語られていた（本質だけ）

今度は技法だけにうつって、本質的な議論が無くなってきている

・行政も勉強しなくなって、訳がわからなくなっている。原理的なところで考えていない（効率的に仕事をこなすだけ）。研究者も原理原則を捨ててしまっている、商売のように目立つことをやっている。

★社会教育は総合的なものであるが、「総合性」が衰退している
社会教育の中核とは？‥社会教育は「教育」なのである、というところの理解。
学校教育とは違うタイプの教育なのである、ということをわきまえないで取り組む人がいる。

★社会教育は「継続性」を前提にしているが、継続性についての意識が希薄化している
例）公民館運営審議会が必置ではなく、任意になって２０年。
　これまでは継続性が前提としてあった。これまでを検証し、きちんと次につなぐ必要がある。
　補助金が与えられて、切れたら終わり→単発的に物事が行われている
　指定管理者制度の導入（３～５年）も然り。継続性が担保されない。
　→学校教育は１人の人間が関わるのは、長くて６年。社会教育は何十年にもなる。

★社会教育についての「志」が消失してきている
社会教育を分かっている人や理解出来る人が、いない。かつては、そういう人がいて、やってきた。そういう人が嫌になってしまう状況を生んでいる。上っ面のことをみると、今までやってきたことは何だったんだと、やめてしまう。精神主義に終わらしてはいけないが、社会教育は社会教育らしくあらねばならない。
社会教育行政が、やろうと思う人を邪魔しない→社会教育の原理的なことである。

３）何が違ってきたか：「生涯学習」という考え方
★「生涯学習」支援の一環として社会教育がある
生涯学習ってみんなが楽しんでいるものだろ、と思われるが、それは誤解である。
生涯学習支援は、色々なところでできる。本屋さんで本を買っても良い。
図書館は、生涯学習支援をしているが、社会教育として支援している。
誤認により、本来必要な社会教育の事業が無くなったら本末転倒である。

★公民館は「地域の問題」を自分たちで考える拠点だった
地域課題や生活課題を解決するための基礎的なことを学ぶ場を、地域で公民館を拠点に、青年会や婦人会が中心となってやってきた。またその中で、個人が自立するために、みんなが学ぶ場もつくっていた。

４）第二次大戦敗戦後の社会教育
５）生涯教育概念の登場と生涯学習社会という目標
★生涯教育：生まれてから死ぬまでの学びを学校・地域・家庭でまとめて考えよう！という、考え方のこと。
★生涯学習：それを支える様々な学習機会のこと。

しかしながら地域課題や生活課題ではなく、個々人の生活を充実させるような施策に傾いてきている。カルチャーセンター化。
生涯学習社会は、学歴社会を変えよう（様々な時期に様々な学習機会がある）、そして学んだらそれを評価していこう、という社会。それは良い社会か？（評価がついてまわる社会）という議論もある。

‥学歴社会は、一発勝負。生涯学習社会は、敗者復活がある？（でも勝負？）

★文部省が「生涯学習社会」によって、学習成果の「評価」を意識付けしてくれた
そこで生まれる問い‥学習の成果は誰のもの？→それは、学習内容によって違うもの
すぐに学習の成果が出るものもあるが、例えば環境問題を学習して、その成果は誰のもの？
他の人のためになることもある。
→行政が提供する学習する機会は、こうでなくてはいけない（自分のために学ぶ、のではなく、他人や地域のために学ぶ）公共的、現代的、社会的課題について学習する重要性を間接的に伝えている
松下圭一「社会教育の終焉」：自立した市民に任せろ、と説いた。でもそれは落とし穴である。
教育はいつの時代、どの立場の人にも必要なもの。

６）社会教育は不要か
７）やはり「人」が支える
８）終わりに：社会教育行政の変化と社会教育委員会制度の意義
★学校教育のしもべに社会教育が成り下がってはいけない
地域の博物館、学校が利用してくれるから存在意義がある、という論理を使っていないか？
学校の利用を優先している。社会教育の社会教育らしさ、どこへいった？少年自然の家やその他社会教育施設も然り。社会教育は社会教育としての意義がある。学校教育の下僕になってはいけない。
社会教育行政は学校よりも先に「参加」の仕組みを取り入れていた（公民館運営審議会など）
「学校とは違っていいんだ」やってもいいし、やらなくてもいい→やろうとしたことはやれる！

★社会教育委員とは？
指導者や偉い人ではない。「学習者」である。地域の人たちが学習する際にどういう障壁があるのか、どのような利便があると良いのか、自身が学習をしているから、何が必要かわかる。一緒にやっていく、という姿勢が大切。
＊良い事例を分析する場合→なぜそれは良いと言われているのか、その事例を可能にした条件を考える。
　自分の状況、条件に照らして現場に活かす。
＊社会教育委員は、社会教育主事や議員、首長をだまして使おう
＊文科省に社会教育局がなくなっている。社会教育を全体として見れなくなっている
　公民館、図書館、博物館‥
＊「社会教育主事」の要請科目を変える
「社会教育計画」→「社会教育経営」に変化する
【計画】：ボトムアップ　みんなで意見を出して、計画を創り上げる。そのプロセスも重要である
【経営】：何か目標が決められていて、それに向かって効率的に進めていくこと。社会教育はそういうものじゃない。→地域の社会教育の計画をつくるのが、社会教育委員！

■所感：
「社会教育」の在り方を考える視点を沢山頂いた。住民の個人的ニーズだけでなく、地域の問題に目を見け共に

解決に向かうための学びや姿勢、関係性をつくる場を提供していく必要があると改めて感じた。今後の社会教育を考える上で、まず私自身が常に「学習者」でありたいと強く思った。

報告資料１－２

令和元年 6月28日

社会教育委員等研修会報告

社会教育委員
笹川博人

1. 期日 令和元年6月26日(水)
1. 会場 新潟市黒埼地区公民館
1. 主催 新潟県社会教育委員連絡協議会

研修内容. 研修Ⅰ＋Ⅲ　　山田啓之氏

全国社会教育研究大会青森大会視察報告及び新潟大会進捗状況

1. 大会スローガン

未来につなぐ「米百俵」～フェニックスの地でひらくこれからの社会教育～

1. 研究主題

新しい社会教育をデザインする

～つなぐ はぐくみ 響き合う 生涯学習社会の実現～

1. 期日 令和2年11月11日(水)～13日(金)
1. 会場 シティホールプラザ「ホールレ長岡」他.

記念講演

女優, エッセイスト 星野知子氏

「世界を旅して ～当たり前の幸せを～」

シンポジウム

テーマ 新しい社会教育をデザインする

～つなぐ はぐくみ 響き合う 生涯学習社会の実現～

分科会

「学校との関わり」
「家庭との関わり」
「地域との関わり」
「社会教育施設との関わり」
「多様な人との関わり」

各分科会約200名. 先進事例の発表. グループ討議

「つなぎ」の説明のなかで、「おたく」という言葉が例として出された。1983年に出現したことばだが、最初否定的ことばであったが、今では専門家といった肯定的ことばに変わったこと、自分自身は鉄道オタクであり、その知識を他の人に伝えることでつながっていくものだということである。そして違いがあることを認識した上でつながろうとすることが大切だという。

新潟大会で大切にしたいものは、その場限りのエピソードに頼るのではなく、目的を明確に、データ等の根拠にもとづいて事実・課題を把握し、これからの社会教育をデザインするヒントを提案できる大会としたいとの報告があった。

社会教育の内部環境と外部環境の分析から、地域コミュニティの変化の中で、世代を超えて人々が学べる環境を整え、社会教育、学校教育、家庭教育がつながりはぐくみ、響きあうことによって相互に発展できるようにすることが求められるし、伝統的な地域コミュニティの変革、NPOやボランティア団体との相互協力や連携など、社会全体が発展していく持続可能なシステムを構築することが重要であり、先輩の様々な取り組みや研究等をもとにしながら事実・課題を把握し、これからの社会教育につなげていきたいということである。

「学びを自信に！ 協力を喜びに！ 違いを豊かさに！」

研修Ⅱ

「　　に向けて」

　　と

青山学院大学コミュ　　鈴木　　氏

社会教育委員は世間からよく理解されていなく、行政にとってもよくわからない存在である。

いい。

の

こと

[illegible]年代から生涯教育機構の提唱と生涯学習社会という目標が出され、地域課題、生活課題など個人の課題となっている。このような時にあって、社会教育は不要かとの問いかけをされれば、不要とはいえないと言わざるをえない。社会教育は学校教育とはちがうもので学校教育のしもべとなってはいけない。社会教育はあくまで人が支えるものであり、校庭だけよくなっても意味はない。社会教育行政が変化しても現今の社会教育委員制度の変革は決して変わるものではなく、これまで以上に社会教育委員の活躍の活躍を願うものであるとしめくくられた。

報告資料１－３

令和元年度　社会教育委員等研修会参加レポート

期日：令和元年６月２６日（水）
会場：新潟市黒埼地区公民館

新潟市社会教育委員
田中　一昭

１．研修内容

研修Ⅰ　全国社会教育研究大会青森大会視察報告、新潟大会進捗状況
研修Ⅱ　講義「社会教育委員は何をすべきか　～新潟大会に向けて～」
研修Ⅲ　全国社会教育研究大会新潟大会に向けてのワークショップ

２．所感

次年度開催される新潟大会の準備がベースにある研修であったと感じています。私自身、初心者的な研修かと思っていましたが 10 年以上続けておられるベテランの方も多く参加しており、少し驚きました。

私なりに感じたことを述べさせていただきます。
新潟大会テーマ：新しい社会教育をデザインする
～つなぎ　はぐくみ　響きあう　生涯学習社会の実現～
山田大会実行委員長の大会に対する熱い思いを感じると共に、山田先生の専門が美術であることから「デザインする」につよいこだわりをお持ちであり、既成概念にいかに自分が縛られていたのか感じる研修でありました。
分科会
「学校との関わり」
「家庭との関わり」
「地域との関わり」
「社会教育施設との関わり」
「多様な人との関わり」
この５つの分科会テーマが社会教育の代表的な分野であり、社会教育委員としてどうコーディネートしていくか？考えましょう。とのお話があり、自分としても社会教育の分野（テーマ）のようなものが明確になったことで社会教育に対して少しすっきりしました。

簡単ではありますが以上で終わります。